



## 古の知恵・技術に学ぶ時代に

本年度の第74回毎日出版文化賞の自然科学部門は、大熊孝著『洪水と水害をとらえなおす』(農山漁村文化協会)が受賞した。大熊は新潟大学の名誉教授で、専門は河川工学、土木史。本書では頻発する水害の実態と今後の治水のあり方を論じている。本書の受賞に時代の変化を感じる▼書名の副題に「自然観の転換と川との共生」とあるように、これまでの河川工事のあり方、考え方の転換を求めている。洪水と水害は別物であり、洪水は川の流量が平常時より増水する自然現象であるのに対し、水害は人の営みにともなう社会現象であるとする。治水問題の解決は越流しても破堤しにくい堤防にあることを力説する▼武蔵野新田を成功に導いた川崎平右衛門は、武蔵野新田開発を終えた後、木曾三川の治水工事に当たった。武蔵野新田開発は玉川上水からの分水によって新田開発が可能になったもので、利水がポイントとなった。ところが木曾三川では利水ではなく治水が任となる。ここでも大きな功績を残したが、平右衛門はどのようにして治水に関する知識・知恵・技術を身に着けたか、個人的に探ってきた。どうも母方の田澤家を通じて田中丘隅に学ぶところが大きかった、と推測する。田中丘隅も含めて江戸時代の治水の主流は関東流で、自然の力を抑えるのではなく、いなすことによって被害を最小限にとどめるところに眼目があった。こうした治水哲学は明治維新以降失われてしまったと大熊は嘆く▼江戸時代も含めて時代を遡って過去に学ぶことは多い。今年の川崎平右衛門研究会は11月20日(金)国分寺市のいずみホールで開催される。テーマは「地域創生と川崎平右衛門」。講演とパネルディスカッションが行われる。参加希望の向きは☎090-5895-3960木谷まで。

(農的社会的デザイン研究所代表 葛谷栄一)